

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 22 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23520423

研究課題名(和文) 東京と南洋を往還する帝国の残映とゴジラ映画史50年の比較文化史

研究課題名(英文) Comparative Cultural History of the Imperial Vision reflected in the Round Trips between Tokyo and the South and the 50 Years History of the Godzilla Films.

研究代表者

猪俣 賢司 (INOMATA, Kenji)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：40223292

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：『ゴジラ』(1954年)に始まる「ゴジラ映画史50年」という“もう一つの文化史”には、成瀬巳喜男、小津安二郎などの戦後日本映画とも連動し、戦前の「帝国」日本と戦後の「敗戦国」日本の連続した昭和史が表象されている。

ゴジラは、「東京」と「南洋」を往復する存在であり、(a)ゴジラ映画が描き続けてきた首都東京の歴史的・地理的特質、及び、(b)『モスラ』(1961年)にも痕跡が残されている戦前・戦後の日本と深く係わった「南洋憧憬」(南洋史観)という二つの観点を交差させ、その「帝国の残映」を浮き彫りにすることによって、「郷愁と鎮魂の空間」としてゴジラ映画の描いてきた日本の戦後比較文化史を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In "Another Cultural History" called the 50 Years History of Godzilla Films beginning with "Godzilla" (1954), there is represented the continuous history of Showa Period of pre-war "Imperial Japan" and post-war "Defeated Japan" in conjunction with the post-war Japanese movies such as Mikio Naruse and Yasujiro Ozu.

Godzilla is existence to make round trips between "Tokyo" and "the South". From two points of view, (a) the historical and geographical characteristics of capital Tokyo which Godzilla films continued drawing and (b) the "Aspiration for the South" (a historical conception of the South) deeply concerned with pre-war and post-war Japan also traced in "Mothra" (1961), it is revealed a comparative cultural history of post-war Japan, by highlighting its "Imperial Vision", which the Godzilla films pictured as a "space of Nostalgia and the Requiem".

研究分野：比較文学比較文化

キーワード：比較文学 ゴジラ モスラ 日本映画 戦後日本 東京 南洋 核兵器

1. 研究開始当初の背景

戦後のゴジラ映画は、船舶の航跡や航空機などの描写に於いて、円谷英二が製作した『赤道越えて』(1936年)や『ハワイ・マレー沖海戦』(1942年)を始めとする戦前の国策映画と連続性を持っているが、積極的に研究されていない。それは、ピーター・B・ハーイ『帝国の銀幕』(名古屋大学出版会、1995年)にも見られるように、「戦前」と「戦後」の文化史が、映画史・映画研究の中では有機的に結び付けられていないからである。

また、従来の研究(例えば、岩本憲児編『映画と「大東亜共栄圏」』、森話社、2004年)では、円谷の『南海の花束』(1942年)などに見られる航空日本としての「帝国日本」と、『モスラ』の翌年に初飛行したYS-11を製造し、航空日本の再生を目指した「戦後日本」との「連続性」を見出すことも困難である。

本研究は、戦前・戦後を断絶したものではなく、嘗ての「帝国」とその文化史が、敗戦国から立ち直ろうと1950年代に再軍備化されるなど、戦後日本の文化史に大きく連動していることを明らかにするために、従来の研究対象にはされて来なかった「もう一つの文化史」とも言うべき「ゴジラ映画史」から抽出される戦後の歴史表象・地理表象(軍事・交通・都市・海洋などの表象)を研究することを主眼としたものである。

そして、ゴジラは、何故、「東京」を襲うのか。ゴジラやモスラは、何故、「東京」と「南洋」を往復するのか。首都東京と南洋が持っている地理的空間の文化史的意味は何であったのか、それを探ることが、本研究の背景であった。

この「東京」と「南洋」の相関関係は、「ゴジラ映画史」研究に於いて顕著な接点を見出すことのできる中心的課題となると考えられるのだが、南洋関係史に関する研究と、映画に描かれた東京に関する従来の研究(川本三郎『銀幕の東京』など)は、何ら連動していない。

また、ゴジラ映画研究には、米国カンザス大学を中心とした、William Tsutsui, *Godzilla on My Mind* (Palgrave Macmillan, 2004) (邦訳『ゴジラとアメリカの半世紀』)などもあるが、日本では、加藤典洋『さようなら、ゴジラたち』(岩波書店、2010年)、四方田犬彦『日本映画と戦後の神話』(岩波書店、2007年)などの評論的先行著述はあるものの、戦前・戦後の連続した文化史が、「東京」と「南洋」を結ぶ「郷愁空間」を形成していることを明らかにしてはしていなかった。

2. 研究の目的

(1) 『ゴジラ』(1954年)に始まる「ゴジラ映画史50年」とも言うべき「もう

一つの文化史」には、成瀬巳喜男、小津安二郎などの1950年代の戦後日本映画とも分かち難く連動し、「帝国」日本と「敗戦国」日本の連続した昭和史が表象されている。ゴジラは、「東京」と「南洋」を往復する存在であった。

ゴジラ映画史の重要な地理的ファクターとして、この東京・南洋間の地理的空間が、からゆきさん(娘子軍)や帝国海軍、復員兵や引揚者らの「移動」とも密接に係わり、南洋憧憬と帝都東京への望郷という二つの「郷愁空間」の相互関係が、戦前・戦後の連続した昭和史を記述する上での重要な要素ともなっている。

(2) 本研究は、(a)ゴジラ映画が一貫して描き続けてきた帝都東京の歴史的・地理的特質という観点、及び、(b)『モスラ』(1961年)にもその痕跡が残されている戦前・戦後の日本と深く関わった「南洋憧憬」(南洋史・南洋史観)という二つの観点を交差させ、これまで学問的俎上に載せられることのなかった50年に亙るゴジラ映画の描いてきた日本の戦後比較文化史を研究するものである。

「南洋憧憬」は、「インファント島」に代表されるゴジラ映画史の中心的主題であり、福永武彦らの『発光妖精とモスラ』(1961年、映画『モスラ』の原作)など、戦後日本の文化史を形成している。これは、『アナタハン』(1953年)、『サンダカン八番娼館 望郷』(1974年)などの戦前・戦後の映画にも見られる帝国日本の南洋進出という現実の歴史(矢野暢『南進』の系譜)などを背景として、日本劇場(日劇)で上演されていた戦後の「踊る南洋」根岸明美などの「芸術表象」とも連動した文化現象である。

一方、「帝都東京」は、戦前・戦後の成瀬巳喜男や小津安二郎が一貫して描いてきた主題であり、1950年代の日本映画史の中で、ゴジラ映画と他の日本映画は確実に交差している。首都東京の歴史的・地理的表象の分析は、昭和の文化史研究として必須のものであると考えられる。

(3) 敗戦国から立ち直ろうとした1950年代の再軍備化や、戦後復興期・高度経済成長期の首都東京など、「ゴジラ映画史」から抽出される戦後の歴史表象・地理表象(航空機・船舶・鉄道・軍事・交通・都市・海洋など)を研究することを主眼とし、大東亜戦争を経験した「帝国の残映」東京と南洋の「往還」、即ち、戦前と戦後の「連続性」を浮き彫りにすることによって、昭和史の表象空間「郷愁と鎮魂の空間」としての「ゴジラ映画史」を明らかにすることを目的としている。

この様に、「東京」と「南洋」が「合わ

せ鏡」のように「創出された故郷空間」として捉えられていた文化史的現象の中で、両者を繋ぐ／隔てる太平洋を去来する「往還」大東亜戦争の記憶の往復の戦後文化史として、「ゴジラ映画史」を位置付けるものである。

大東亜戦争
復員・引揚
戦死者の魂霊・鎮魂

東京
戦前 + 戦後
南洋

1950年代の日本映画史
ゴジラ・モスラの「往復」
帝国の残映とゴジラ映画

本研究は、日本映画史研究の片隅に置かれているゴジラ映画史を、1950年代を中心とする成瀬巳喜男や小津安二郎などの日本映画と同等に捉える学問的枠組みを構築し、それらの映画作品に描かれた戦後の「東京」が如何なるものかということ、「ゴジラ映画史」の視点から逆に照らし出すことにもなる。

3. 研究の方法

本研究の方法は、戦後のゴジラ映画とその周辺、及び、戦前の国策映画、戦後の成瀬巳喜男、小津安二郎を軸とする1950年代～1960年代の日本映画を題材とし、そこに描かれた航空機、船舶、鉄道、都市、及び、その建造物、また、南洋の島々などを正確に特定して分析することにより、(a)昭和の交通史・軍事史とその映画表象との関係を明らかにすること、(b)戦前の委任統治領南洋群島と帝都東京の歴史的・地理的關係と、戦後に於けるその連続性／非連続性を明らかにすることにある。

そのため、地理、及び、歴史的事実と照合しながら、映画の表象空間に再現された「場所」と「移動経路／手段」の特性を測ることが必須の作業となる。

本研究は、従来の映画理論とその実践に基づく研究とは異なり、銀幕に描かれた「モノ」(乗り物や建物などの物質文化、産業考古学)、及び、想定される地図上の地理的「位置」とその「交通」に着目して研究を進めた。

4. 研究成果

(1) 映画の中の東京と現実の東京の比較照合 ゴジラ映画と東京

ゴジラ映画と他の日本映画(成瀬巳喜男、小津安二郎など)が描き続けた主題でもある「東京」(特に、隅田川～新橋・銀座・有楽町～高輪・品川～東京湾)の

地理的・歴史的背景を精査するために、東京都立中央図書館、江戸東京博物館などを利用し、江戸東京の街並み、河川・堀割、港湾(東京湾の埋立、東京港)と羽田空港などの変遷と、ゴジラ映画史に現われた「東京」との相関関係を調べた。

とりわけ、都市中心部を縦貫する形で鉄道高架線(新橋-有楽町-東京駅間など)を敷設した日本の鉄道文化史と映画に描かれた鉄道との関係を調査した。

また、映画に描かれた東京の道路・鉄道網や河川・橋梁を特定し、その歴史的・都市論的意味を探ることによって、映画のトポス(歌学で言えば「歌枕」)を明らかにし、ゴジラ映画に描かれた「東京」との関連性を探った。これは、表象論として掘り下げられた映画作品の研究(蓮實重彦『監督 小津安二郎』など)と、現実の「場所」(ロケ地の意味も含め)を追求する研究を融合させるための方法でもあった。

その一環として、具体的に、東武伊勢崎線隅田川橋梁や京急本線八ツ山跨線線路橋などの実地調査を行ない、『ゴジラ』や小津の『東京物語』、『早春』などの映画と、東京の鉄道線の戦前・戦後史との関係を考察した。

また、総武緩行線松住町架道橋、昌平橋、両国橋、及び、総武緩行線隅田川橋梁など、総武緩行線高架橋(御茶ノ水・秋葉原・浅草橋・両国間)とその周辺の景観・風景の現地調査なども実施し、東京都立中央図書館での「火災保険特殊地図」(火保図)などの閲覧とも併せ、『ゴジラ』や小津、成瀬の『稲妻』などの映画と東京の鉄道線や橋梁との関係を、継続的に調査した。

猪俣賢司(論文)「鉄道線と銀幕の風景 ゴジラの足跡を辿る東京 1954年」(人文科学研究 第132輯 2013年3月、19-39頁)は、それらの調査を踏まえ、鉄道橋の都市景観、都心部への鉄道線の延伸、及び、戦前と戦後(1930年代と1950年代)の連続性について論じたものである。

(2) ゴジラ映画の描く東京と文学に表現された東京 映画と文学の交差

ゴジラ映画史以前に東京を描いた歌川広重、幸田露伴、北原白秋、永井荷風、木村莊八、長谷川時雨などの著作品も比較対照しながら、映像・文学・都市の交差するところで、東京湾から南洋へと広がる「東京」の比較文化史を考えた。

また、「郷愁空間」として映画の中の東京を論じた近年の研究(ミツヨ・ワダ・マルシアーノ『ニッポン・モダン』、名古屋大学出版会、2009年)もあるが、「東京を故郷とする者の視点」を重視し、本研究では、国内交通網の整備や労働人口

の集中化とも連動して、銀幕上の「東京案内」、現実の「観光空間」としての様相を帯びつつあった東京について、戦後日本に於ける昭和史の「郷愁と鎮魂の空間」という観点から東京論を構想した。

(3) 「南洋憧憬」の調査研究 銀幕の「南洋」と現実の「南洋」

ゴジラ映画史では、専ら「内南洋」(委任統治領南洋群島、「インファント島」など)が想定されているが、『ゴジラ』と同じ「成瀬組」が製作した『浮雲』(1955年、林芙美子原作)にも見られるように、仏領印度支那などの「南方/外南洋」も「南洋」であり、この様な戦前・戦後の南洋をめぐる複雑な文化史を整理し、現在では「嘗ての日本の一部」であったという記憶すら失われている「南洋」(山口誠『グアムと日本人』、岩波新書、2007年)について、戦前の現実と戦後の映画を比較することにより、「南洋憧憬」の実体を明らかにする予定であったが、これはあまり進められなかった。

また、琉球沖縄は、「日本の中の異国」(赤嶺守『琉球王国』、講談社選書、2004年)とも言われる「国内南洋」であり、「南洋憧憬」の文化史を考える上で重要な視点の一つともなると当初考えて、琉球沖縄の戦時下の歴史的事実と東京大空襲を経験した帝都東京との関係を視野に入れながら、昭和史の「郷愁と鎮魂の空間」としての「南洋」を吟味する予定であったが、これはほぼ断念せざるを得なかった。

それは、現実の「南洋」と銀幕の「南洋」を比較照合しようとする方法そのものが、歴史研究に深く係わる困難な方法でもあり、また、琉球沖縄の問題に至っては、極めて現実的な難題を孕み続けているため、上述した(1)及び(2)の東京研究のようにはゆかなかったことが要因であると考えられる。

(4) 東京と南洋を往復する郷愁の「帝国」

「東京」と「南洋」を結んでいる文化史「郷愁空間の往還」を明らかにするために、交通史・軍事史の側面と日本映画(文学作品も含む)の中の表象論的側面との相関関係を分析しようとしたが、これは、猪俣賢司(論文)「東京遊覧と南洋の反照としてのゴジラ映画史 成瀬巳喜男の『浮雲』とゴジラの歩いた戦後の東京」(人文科学研究、第127輯、2010年11月、113-151頁)などで既に論じたことをあまり越えることはできなかった。

(5) 核兵器の戦後史

2011年3月11日以降の我が国の原子力発電所の事故に鑑み、原子核エネルギーの非軍事的利用を含め、核兵器の戦後

史を射程に入れて、本研究内容の方向性の再検討を試みた。当初の計画では、ゴジラと原水爆との関係はあまりにも明らかであり、既に多くの言及がなされているため、最終年度に原水爆の歴史を僅かに加味するだけの予定であったが、「東京」と「南洋」の差異を考える上でも、極めて重要な視点でもあるので、『ゴジラ映画史』研究の一環として導入することにした。

しかし、これが難儀を極めた。まさに現在進行している我が国の課題とあまりにも直結しており、時にグロテスクな様相を呈する現実の問題が、表象論としての映画研究の方法を超えていたからである。

原子力・核兵器、第五福竜丸とゴジラ映画史との関係を構想するために、当初の計画にはなかった多くの時間を要したが、「第五福竜丸」や、原子核エネルギーの軍事利用及び非軍事的利用の戦前・戦後史と「ゴジラ映画史」との関係を探ることができた。猪俣賢司(論文)「発光する背びれと戦後日本 核兵器とゴジラ映画史」(人文科学研究、第130輯、2012年3月、1-29頁)は、映画『第五福竜丸』(1959年)と『ゴジラ』の比較、放射能とゴジラ、核兵器の戦後史を論じたものである。

また、この観点に関連して、本科研費主催で国際研究会「ゴジラと戦後日本の原子核エネルギー」(2015年5月22日、新潟大学五十嵐キャンパス)を開催し、シュテフィ・リヒター(ライプツィヒ大学)、岸田隆(理化学研究所)、アンニャ・ホップ(新潟大学)、石田美紀(新潟大学)、及び、猪俣の発表・討議を通してワークショップを行なった。ここでは、現在の日本が抱えている困難な現実が明らかにされた。猪俣は、「発光する背びれ 水爆か、生命か」と題して討議した。

核兵器に関連するものとして「現代視覚メディアにおける放射性物質表象に関する領域横断的・国際比較研究」(2015年度申請、基盤研究B、研究代表者石田美紀、研究分担者7名、研究分担者猪俣賢司)を申請したが、不採択となっており、この方面の研究の難しさを表している。

(6) 水爆か、生命か 郷愁と鎮魂の昭和史、「抗核」とゴジラ映画

「東京」と「南洋」を結んでいる文化史を明らかにして、昭和史に於ける「帝国」の連続性「東京」と「南洋」の郷愁空間の往還という観点から、大東亜戦争や原水爆の記憶が往復する戦後文化史として、「ゴジラ映画史50年」の比較文化史を学術的に位置付けてきた。

猪俣賢司「東京湾から南洋へ ゴジラ

映画史と帝国日本」(単行本,共著『人文学の現在(いま)』,創風社出版,2012年,179-202頁,所収)では,戦前の国策映画,1950年代~1960年代の日本映画を含めて,昭和の交通史・軍事史とその映画表象,及び,戦前の委任統治領南洋群島と帝都東京の歴史的・地理的關係と,戦後に於けるその連続性についてまとめた。

また,表象文化論学会第9回研究発表集会(2014年11月8日,新潟大学五十嵐キャンパス)に於いて,シンポジウム「ゴジラ再考」を行ない,猪俣は,「水爆か,生命か 発光する背びれと東京 1954年」(「ゴジラの歩いた東京 1954年 帰りがかった祖国」,「発光する背びれと銀座のネオン」「水爆か,生命か」,南下する鎮魂の隅田川 亡夫魄霊の姿・複式夢幻能,生命としてのゴジラ「抗核」と「故郷」)という観点から話題を提供した。

このシンポジウムの機会に,ゴジラ映画と東京についての補足的発見として,『ゴジラ』に於けるパトカー炎上(ビルの上に姿を現わしたゴジラの白熱光による)のシーンが,天ぶらの「銀座天國」の屋根が判別できることから,そこが銀座8丁目交差点であることを特定した。ゴジラが銀座に進入した経路が,これで明らかになった。

尚,これまでの研究をまとめて,単行本(単著)として出版する予定を進めており,現在,執筆中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者,研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

猪俣賢司, 鉄道線と銀幕の風景 ゴジラの足跡を辿る東京 1954年,人文科学研究,査読無し,第132輯,2013年3月,19-39頁。

<http://dspace.lib.niigata-u.ac.jp/dspace/handle/10191/22271>

猪俣賢司, 発光する背びれと戦後日本 核兵器とゴジラ映画史,人文科学研究,査読無し,第130輯,2012年3月,1-29頁。

<http://dspace.lib.niigata-u.ac.jp/dspace/handle/10191/17744>

〔学会発表〕(計1件)

ミツヨ・ワダ・マルシアーノ,林田新,猪俣賢司,石田美紀,シンポジウム「ゴジラ再考」,表象文化論学会,第9回研究発表集会,2014年11月8日,新潟大学五十嵐キャンパス(新潟県新潟市),猪俣は,「水爆か,生

命か 発光する背びれと東京 1954年」と題して参加。

〔図書〕(計1件)

愛媛大学法文学部・新潟大学人文学部編『人文学の現在(いま)』,査読有り,創風社出版,2012年3月,総204頁,猪俣賢司,「東京湾から南洋へ ゴジラ映画史と帝国日本」,179-202頁。

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

猪俣 賢司 (INOMATA, Kenji)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号: 40223292